



時代を越えてハイテクをカタチにする銅 兵庫県・荒田神社

日本の中心点「日本のへそ」の愛称で親しまれている西脇市駅からバスで45分。目的地「荒田神社」に足を運ぶ。ご案内は神社総代の辻井喜八郎氏にお願いすることができた。

平安時代、本神社は蝦夷討伐で有名な征夷大將軍・坂上田村麻呂が参拝したと伝えられ崇敬を受けてきたという。

山麓やや段丘状の大地に東南に面して播磨国二ノ宮の荒田神社があった。見るからに風格を備えている由緒の深い神社であることが感じられた。まず目につくのは広壮で立派な鳥居である。写真に示すとおり鳥居では最も発達した段階の両部鳥居であり、神社名を明示する額の上に唐破風様の銅屋根が付け加えられていて鳥居全体を引き締めている。

脇柱の根方を見て驚いたことに約1ミリ厚の銅板が巻かれている。

木造建築で礎石と柱の間に、腐食防止のうえ建築自体の永続を目的として“かなとこ（銅鎖）”を使用するケースは、建築家山田水城先生も建築史上に銅が登場する最初ではないかと述べられるごとく、銅使用の歴史では柱の根本に銅板を使うのは貴重な施工例である。

中国の代表的な建築家敦楨著書「中国の住宅」に殷代（BC14世紀～12世紀）の木造建築への銅鎖の用い方が記述されている。

「土を固めた真壇の上に、直径30～50センチメートル位の卵形の自然石として並べ、その上に銅鎖を置き木柱を立てたのである」

つまり、この銅板は防湿用のかなどこで、礎石上に立てられた構造的に重要な柱脚部の防腐効果を期待したものである。

中国・殷代の人々の英知に驚くばかりである。

神社の鳥居から反対側には妙義山が展望され、記録では多くの旧坑を残し山全体が鉱床ともいわれた。神社周辺もその昔“多田銅鉱山”という名ご先あり、まさにこの付近一帯が産銅地帯であったことがうかがえる。

その鉱床から産出した鉱石を製錬したものとされる“からみ”（銅の溶鉱で分離される銅滓）が以前に発見された。分析・調査の結果、鉄を相当に含有していたが、それ以上に銅・鉛・亜鉛を含んでいた。したがって、荒田神社境内で銅製錬が行われていたものと想像できる。

日本の銅鉱山 製錬 加工の用途活用の歴史。

今回の取材は歴史をひもとく機縁になった気がしている。

弥生時代（2,300年前）に中国から金属製品が入り始め、併せて、人も技術も入り始めた。

渡来人の動き、戦に象徴される八幡の旗印（荒田神社は祭祀の一つに八幡大神がある）さらに全国にある多数の八幡神社・その発源地。九州は東北部に位置する「宇佐八幡」。その宇佐八幡に残る記録、世紀のプロジェクト。聖武天皇による「奈良の大仏造営事業」。当時のハイテク素材「銅」が文化生活レベルアップに貢献し現在にも生き続けている。



参考
山田水城（工学博士・建築家）
「銅屋根と銅鎖のはなし」
葉賀七三男（日本産業技術史学会理事）「荒田神社」



境内から発掘されたカラミを辻井氏よりいただく

